

嵐：詩

著者	梅崎，春生
雑誌名	龍南
巻	2 2 6
ページ	7 1 - 7 2
発行年	1933-11-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/7146

嵐

目を上げると、今まで芝生に影を投げて居たにれの木が、葉一つ一つに濕氣を含み今は雲の影におされて、影は芝生の中に吸ひ込まれる。此の風は芝生の一本一本を揺り動かすのだらうか。風の意志は此の揺り動かされる芝生の様な俺の心にのぞみ、嵐を畏れながらもいらだち待つ心だ。庭にはは

梅

崎

春

生

たはたと洗濯物があふり、清潔な曹達の匂
 ひを大地にふり落す。雲足の速さは刻々に
 れの皮をかぎろはせ、俺の心は一枚の濡れ
 た旗となる。嵐の豫感に今縁に立てば遠景
 をわたる風の意志は、遠景の樹々の屈服を
 強ひつつ。おお、これの木は争闘の前の亢奮
 に我を忘れて葉をさめめかす。縁に立つて
 双手を伸し、嵐を望み待つ俺の心は、はた
 はたはたと聲をあげて手もふるふ程の緊張
 の中に今影の様に、嵐は大きな手を擴げて
 渡つて来る。